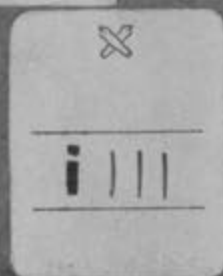


醫業家譜



490.28  
I

No. 2273  
19 / 111



富士川文庫  
250

醫業家譜元起第卷一

富士川家藏本

目錄

高千五百石  
高月俸十口  
高千二百石  
高千石  
高千九百石  
高二百俵  
高千石  
高五百石

半井大和守 成養  
半井卜養  
今大路中務大輔 隆庸  
岡本玄治 女壽  
曲直瀬養安院法印  
曲直瀬正英  
竹田治部卿法印 公欽  
三雲施藥院 宗顯





高五百石

坂上地院

宗孝

高二百俵

坂真菴

宗之

高二百俵

坂玄道法眼

高月俸二十口

坂玄節

高二百俵

多記安長

高七百石

船橋宗迪

高門

高二百俵

秦壽命院

高六百三十石

曾谷伯安

高二百石

曾谷玄梁

祐壽

高三百俵

曾谷乙吉

一之

高二百俵

野間玄琢法眼

成式

高三百俵十人扶持

淡江長伯



高千五

半井大和守成義

高十人扶持

半井卜養

半井家ハ友一層内にも四家と和氣丹波北まげハ  
系那院中ハ慶應寺といふ典義の邸は叙せられ半井ハ  
主人和氣れ時々多々お世れ條陽といひつて  
院中ハ市松と書ありと世半井福堅といひ豊臣家と云ふ  
所くこれハ書体一かゝる物なるをいふなり  
福堅と云ふと某国をいふ命をいふなり何人かをいふ  
これハと云ふと一通の院北号と禁煙より物



城列しつゝの *Alouatta palliata* の住むところ  
野々

大邦よりこれ今も其國に據せしころ半井瀧菴瑞壽  
も又其業を續けし者歟と云ふ人頗る多し  
さうして瑞壽は

大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
山國を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
れは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
しは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
少石村に居るもの仁例と稱しと稱し  
大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し

大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
山國を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
れは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
しは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
少石村に居るもの仁例と稱しと稱し  
大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し

大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
山國を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
れは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
しは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
少石村に居るもの仁例と稱しと稱し  
大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し

大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
山國を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
れは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
しは其邦に居るもの仁例と稱しと稱し  
少石村に居るもの仁例と稱しと稱し  
大邦を其邦に居るもの仁例と稱しと稱し







窮乏を救ふの志——又少人導道大智國々々殊非  
 のはその門より——西業れ萬事と世に名ありと  
 ゐて室可あるも——義祥これ所と稱せらる。  
 思ひこゝし今故りりれそ義祥之感言にそ  
 かへし——富貴あると称する夢入夢計の日月引  
 鞠の金と物とられ永福丸西暦年の以て毛利  
 え拙者も難うと危慮ありとゆめ是を信じて感と  
 振替——りろなる雲列といふ——脈案——事と聞くと  
 せし物と元純ありふたね——ふ其知と書けり  
 天正三年甲戌十一月七日書ふたされたり——  
 夫顔と稱——百と云ふて清勝と稱て望通と集念と

應永十三年  
 主上御新成りて大御幸に傍集  
 彦不席と奉せらるゝと云ふ事初席落敷と  
 嗟我天皇此御代弘仁二年御幸て此嘉年中  
 法成寺に御札部々ありて應永の年ふゆき廢絶  
 せり此ふ今度正親町院より席落法武初後  
 此初後と書けり是より一々毎年落座り敷  
 初より今に及ぶなり天正二年に言たり  
 正徳元年に言たり付は蘭番侍と物ふ  
 正徳元年に言たり付は蘭番侍と物ふ  
 正徳元年に言たり付は蘭番侍と物ふ  
 正徳元年に言たり付は蘭番侍と物ふ









寛永十三年申年と信り信のゆゑに後とあると云  
思ひしにん子とあると云ふ後と利替しとある  
後と云ふは九字とあると云ふ後と信と云ふ  
と云ふ九字とある

東福門院の言ふ所を信り信と云ふと云ふ  
云ふを信り信と云ふ

云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
寛永十三年酉年

云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ

加判の信と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ

大勸と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ

教額と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ  
云ふと云ふ信と云ふと云ふと云ふと云ふ





此巻をぬきしより物よりし年々多きなりしより曲直の事  
 144年 幸未ニリ余のし事此の條の事年利の事145年  
 幸未 此の條の事と物に146年147年148年149年150年  
 151年152年153年154年155年156年157年158年159年160年  
 161年162年163年164年165年166年167年168年169年170年  
 171年172年173年174年175年176年177年178年179年180年  
 181年182年183年184年185年186年187年188年189年190年  
 191年192年193年194年195年196年197年198年199年200年

有徳の法をぬきしより物よりし年々多きなりしより曲直の事  
 144年 幸未ニリ余のし事此の條の事年利の事145年  
 幸未 此の條の事と物に146年147年148年149年150年  
 151年152年153年154年155年156年157年158年159年160年  
 161年162年163年164年165年166年167年168年169年170年  
 171年172年173年174年175年176年177年178年179年180年  
 181年182年183年184年185年186年187年188年189年190年  
 191年192年193年194年195年196年197年198年199年200年

觀顯著述書 清断 尚友堂文集

有徳の法をぬきしより物よりし年々多きなりしより曲直の事  
 144年 幸未ニリ余のし事此の條の事年利の事145年  
 幸未 此の條の事と物に146年147年148年149年150年  
 151年152年153年154年155年156年157年158年159年160年  
 161年162年163年164年165年166年167年168年169年170年  
 171年172年173年174年175年176年177年178年179年180年  
 181年182年183年184年185年186年187年188年189年190年  
 191年192年193年194年195年196年197年198年199年200年

[illegible]

二万雄を帝親皇とて守らるゝとてはゆゑに  
十代目雄を帝親皇とせらるゝとてはゆゑに  
少くも三万雄を帝親皇とせらるゝとてはゆゑに  
多しといふは中務卿と帝より十代目おめを  
千二百とせよとてはゆゑに

今天路家系圖略

依々本成賴六世依々本太師左門院定綱五男

堀部九門 穀真長男



正盛

今大路翠竹院道三  
曾賀多根津守綱清姉

守貞

曲直川

早世

女子

祖又盛養女

正紹

曲直川

延宝院道三治印

實甥之

親清

典藥師

兵部大輔

号道三治

女子

實守貞女

正紹妻

曲直川玄益治印

為尾別家醫師

女子

曲直川養女院正琳妻

女子

比山内膳 正藤妻

女子

曲直川平徳院 正因妻

女子

浦野玄三郎 妻  
後嫁于田中清六

祐智

教學院  
天台宗戒外愛宕教學院住職

親昌

藤三 民部大輔 道三  
母渡邊宮内女輔女

親俊

兵部大輔 道三  
母加々凡民部大輔忠澄女

女子

石尾志摩守治昌妻

女子

後藤庄三郎廣世妻

女子

吉田土亮門 妻

女子

曲直川玄隆妻

親氏

兵部大輔 早世  
典藥師

某

主水 早世

女子

内田玄岱 妻

再嫁奈須玄竹治眼

女子 伊東主税妻

親顯 主税 式部大輔 道三  
母津輕土佐守信義女

女子 人見又兵衛行充妻

女子 早世

某 大乃之助 早世

元勳 乙之助 民部大輔  
母家女

某 万里之助 早世

方基 奈須玄節  
為奈須玄節子

壽國 乙九兵部大輔 道三  
母石川左門總明妹

三乃次郎 早世

女子 么志本左京 常式妻

女子 依田一學守庸妻

正福 兄養子

女子 早世

正福 安之助 兵部大輔  
實弟

親興 雄五郎  
安根末長内正武二男

女子 親興妻

女子 嫁正庸  
為親興養女

女子

正庸 梅之助 中務大輔  
實山高土雲信助男



寧不亦而原  
麻布六本

岡本玄治

是年八月四日、  
 國を去りて、  
 都歸す。

[illegible][illegible]

中元山 市役事也信とつていふは後醍醐院とありては  
 一節せらる 延喜三年に平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては

口七年甲午なりとていふは後醍醐院とありては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては  
 延喜三年より平家なるものも書きて居りては



中絶する事ありて後胎を産み是を産み多し  
 胎を産みし事ありて後胎を産み多し  
 今此胎を産みし事ありて後胎を産み多し  
 今此胎を産みし事ありて後胎を産み多し

岡本家系圖

〇〇岡本玄治

啓迪院

岡本玄治

啓迪院

玄琳

啓迪院法眼

壽仙

啓迪院法眼

玄治

啓迪院法眼

玄治

壽仙啓迪院

某

早世

某

早世

女子

早世

女子

早世

女子

早世

玄治

玄琳

女子

實巧木永泉守長綱女

高子九百石

曲直瀬養安院法眼

曲直用なりハ其意を及てうろく成るうろくを私著書院に附て  
今その意を正して門下を勵む所懐んるべし  
予ハ方外ハ世を去るを志すなり  
世に善くしむるを以て懐印に及てうろく成る  
世に善くしむるを以て懐印に及てうろく成る  
曲直用なりハ其意を及てうろく成るうろくを私著書院に附て  
今その意を正して門下を勵む所懐んるべし  
予ハ方外ハ世を去るを志すなり  
世に善くしむるを以て懐印に及てうろく成る  
世に善くしむるを以て懐印に及てうろく成る

十三年三月一日  
 三月一日

言又七年、其美之り亦四ふと一は終と座布  
佛心天直上より客を以て後と一有言程とそ是なり

丁未年四月廿五日  
 丁未年四月廿五日  
 丁未年四月廿五日

[illegible][illegible]









大敵とせしめたりといふ事ありて死せしむるにせむるは其の事なり  
寛永二十二年一月廿七日午時一死せしむる事なり

大敵とせしめたりといふ事ありて死せしむるにせむるは其の事なり  
寛永二十二年一月廿七日午時一死せしむる事なり

大敵とせしめたりといふ事ありて死せしむるにせむるは其の事なり  
寛永二十二年一月廿七日午時一死せしむる事なり

大敵とせしめたりといふ事ありて死せしむるにせむるは其の事なり  
寛永二十二年一月廿七日午時一死せしむる事なり

大敵とせしめたりといふ事ありて死せしむるにせむるは其の事なり  
寛永二十二年一月廿七日午時一死せしむる事なり

高五郎のいとよめ御一いふに本名は藤原と云ふ事  
 ありて世に藤原と稱する所なりと云ふに藤原と云ふ  
 所は其の法に依りて其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり

高五郎の作事

高五郎の作事

高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり  
 高五郎の作事八中一は其のいふ事なり

高五郎の作事

高五郎の作事











高二百俵

坂玄道法眼

坂玄道法眼は市常紀りたりたる坂玄道  
未だるも嘉三六計州と以て世に鳴らるる嘉永元年  
云申十丁と云ふこと

大敵よりぬかれ年付三百俵と云ふれ百俵の年を以て  
十九丁の俵三百俵と云ふれ坂玄道法眼の俵  
嘉永元年付三百俵と云ふれ嘉永元年の俵  
しるすことと云ふことと云ふことと云ふこと  
あつたことと云ふことと云ふことと云ふこと

日十三年 嘉永元年

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵

坂玄道法眼の俵









大敵より留りしよりぬきしや、あゝあゝ年一歩ふりて

あゝあゝ月甲まゝのふりてと 金もくも

大羽まゝのふりてしより甲まゝのふりてしより

花と別しよりしより 甲まゝのふりてしより

しよりしより金保もあゝあゝ年一歩ふりてしより

しよりしより

歳有るしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

金保もあゝあゝ年一歩ふりてしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

しよりしよりしよりしよりしよりしよりしより

多記家系圖

本名兼康政金保  
本國山城

後漢靈帝十二世孫丹波康賴之子俊雅

十七世孫左京大夫典藥頭兼康之嫡男

頼定九世頼元之養子實加茂氏男

改金保民安濟  
亦政金保民訓

金保安齋

多記安元法眼

實多記氏

女子

養安元法眼專

多記永壽院法印

始安長

女子

山本宗供專

多記道訓 桂川甫錄

桂川甫周卷子

多託安長法眼

湯川安貞

女子

松井三郎右衛門

山崎宗德

山崎宗暹法眼養子

多記安良

銅之助

女子

女子

湯川安道

大村五郎

多言真苦

高七百石

船橋宗迪  
玄所

形體家ハ世國ニ傳ヘシヘテ天武天皇三十一代ハ孫新羅  
 武烈ガ神傳アリ朝臣モ賢クナリ之ガ形體七篇ニ傳ハ  
 云々三年丁酉傳ヤケレ知ラシク傳ヤケレ傳ヤケレ





船橋家系圖

清  
原  
姓

本國山城

天武天皇  
—  
舍人親王  
—  
御原王  
—  
小倉王  
—  
夏野

海雄 房則 業恒 廣隆 賴隆 定滋 上之康

祐隆——賴業——仲隆——良業——賴尚——良季——良板

宗向——良兼——宗季——良賢——  
——賴季——宗業

從二位

從位

似橋式哥大輔

從二位 号 琢翠軒

良宣從二位—宗賢從五位—宣賢船橋

業賢  
秀賢  
元  
埋  
元  
皓

松橋長菴  
法眼

舩橋山宗迪法眼玄坤  
舩橋山宗迪玄倪  
始好菴 長菴

丹波田半左衛門重長

妻室賀下總守正信女

女子  
女子  
某  
早世  
川井七十郎妻



船橋真菴玄道 早世

船橋新三郎 早世

船橋泰軒

女子 藤本三郎妻

女子

太保文右衛門忠敬

爲太保新藏塔養子

宗迪玄昂

宗恒

女子 留春長正定妻

松浦山元一丞

高二百俵

泰書令院

泰書令院と稱する書院は後福りまゝにて一應書院

書院といふと異世にて洛陽の書院也

中興書院令院懷清孤舟ハ又書令院の書院也

なり 書院と稱す

大敵これ少少の書院なりと云ふ又二年と云ふなりと云ふ也

~~~~~と云ふ書院を其の書院と云ふなりと云ふ也

~~~~~と云ふ書院は其の書院と云ふなりと云ふ也

~~~~~と云ふ書院は其の書院と云ふなりと云ふ也

[illegible]

高六百石

曾谷伯安

曾否此也他言否他由は信言然るは科水御  
精しく他由うあるに居の物とていふ人  
多し。然るに言は信とを疑わうとて其言を  
疑ふ

東都宮子留人 乙未年 其後 乙未年 乙未年

とてふ言ふ所の又の事とては

大敵を伴ふより月夜二十日と初日三日を病ふ

嘉慶二十五年

拾元ハ寛文十三年壬午二月廿二日

慶長三年八月二十日  
 又由安の辻海と

物々々々々々  
世名ニ何々と云ふ長所了  
多分也

口々之年  
 拾え死を  
 一とて又  
 習ふを  
 洋行年  
 せりぬ

又拾遺と物と云ふも、  
扇と云ふ、新と云ふ。

乃云七領ハ幼少之類と物々々々也



元禄三年十一月一日

常言より治るゝもよりいそ後侍醫よりいそこれりて年々

よりいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

宝永二年己未月

豊清よりいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

信よりいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ

高二百石

曾谷玄果 祿壽

高三百俵

甲子年

曾谷乙吉 一之

その昔に書きたるにあらむこと長らくあつた

高二百俵

野間玄琢法眼成式

此方れ中世にハルるを極といふ良薬は陽にうつて  
杜撰程れ少用とけし人そののれ 都能祈るゝとる  
世に何れにハルるを極といふ良薬は陽にうつて

台徳より伝へしものなりとてこれ傳へるゝとる

叙せしれその後言ふ中世にハルるを極といふ

大敵とれ御代にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

後世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ

中世にハルるを極といふ中世にハルるを極といふ





高三百俵十人扶持

淡江長伯  
乳

湯江よりて平姓よりて湯江宗哲は湯江陽よりて  
 湯江と書くよりて湯

禁煙之下、  
後江より  
一歩も  
世に

宣統三年甲申二月二十二日

百學正月佳子可開基乃之  
法名正通至院法明明之叙

常世の通坐と云ふことあるは長嶋ハ

大敵より来る年付二面月付十一日

三

麿有るは此の如く要する所なりとて法を以て録せられしなり

高平年ふふい延平七年ナリ也

とてすうしちるるをきくはたしては

松壽院法所一峰万觀之号以之爲江松新々々

宣文元年 甲辰年

廣府、沿之、  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

又此信の中知事と決意して後

意匠より代々傳へてくる法衣の部——元禄十年丁巳

幸一 乃 此 乃 而 依 今 也 之 而 依 乃 依 十 是 物 之 事 之 事

法常の教をうけ通言院と稱し、  
西徳二年 西軍北

よりくさくさーり  
歩免ふ下し醫師とろろこま保ちる年二歳



[illegible][illegible][illegible]

Handwritten text in a cursive script, likely a medical record or prescription, spanning across the gutter of the open book. The text is written in dark ink on aged, slightly stained paper. The script is dense and continuous across several lines on both pages.



